

訓讀説文解字注（八）

森 賀 一 恵

富山大学人文学部紀要第74号抜刷

2021年2月

訓讀說文解字注（八）

森 賀 一 惠

「訓讀說文解字注（七）」に續いて、段玉裁『說文解字注』第十二篇上を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀說文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に1) 2) 3)等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。

十二篇上（手部「擗」～「擗」）

擗^(一)，奉也^(一)，从手奉聲^(二)，

擗^(三)，奉ぐる也，手に従ふ，奉の聲，

（一）「奉」なる者は「承む也」¹⁾。

（二）敷容の切，九部。

擗^(四)，擗也，从手擗^(一)，

擗^(三)，擗ぐる也，手擗に従ふ，

（校）「擗」，二徐「擗」に作る。二徐，「擗也」上に「對」字有り，「手」下「擗」を「擗」に作り，「擗」下に「聲」字有り。

（一）此の篆各本「擗」に作り，「對擗する也，手に従ふ，擗の聲，以諸の切」と云ふ²⁾。下文「擗」「擗」二篆を出し，即ち「擗」篆を出して，「對擗する也，居許の切」と云ふ³⁾。特だ義同じなるのみならず，形聲亦た皆な甚しくは異ならず。許を讀む者，往往にして疑ふ。今『玉篇』列字の次第を按ずるに「擗」下「擗」上「擗」に作り，「丘言の切，擗也」と⁴⁾。説文「擗」下「擗」上則ち「擗」に作る。顯らかに是れ「擗」篆の譌り。蓋し希馮⁵⁾『玉篇』を作る時據る所の『説文』

1) 三篇上(35b)収部。十二篇上(34a)「承，奉也」。

2) 『繫傳』は「以虚反」。

3) 『繫傳』は「擗」が手部末にあり，「猶良反」。

4) 『大廣益會玉篇』手部第六十六。

5) 『陳書』顧野王傳「顧野王字希馮，吳郡吳人也」。

未だ誤らざる也。『説文』本と「擧」有りて「擧」無し。後人自ら譌舛する^{のみ}耳。『廣韻』廿二元亦た曰く「擧は擧也」と⁶⁾。上林の賦⁷⁾、『毛詩』箋⁸⁾、『漢書音義』⁹⁾、『通俗文』¹⁰⁾皆な「捷」有り。「捷」は即ち此の「擧」篆也。字手、擧に从ふ、會意。邱言の切、十四部。

擧、飛擧也、从手易聲^(一)、𠄎、古文揚、从支^(二)、

揚、飛擧する也、手に从ふ、易の聲、𠄎、古文の揚、支に从ふ、

(校) 小徐、「𠄎」を「𠄎」に作る。大徐、「揚从支」三字無し。

(一) 與章の切、十部。

(二) 漢碑「颺歷」を用ひ¹¹⁾、他文「敷歷」を用ふ。皆な『今文尚書』般庚の「優賢揚歷」¹²⁾を用ふる也。

擧、對擧する也^(一)、从手與聲^(二)、一曰與也^(三)、

擧、對擧する也、手に从ふ、與の聲、一に曰く、與く也、

(校) 大徐、「一曰與也」四字無し。

(一) 「對擧」は兩手を以て之を擧ぐるを謂ふ。故に其の字「手」、「與」¹³⁾に从ふ。ナ手^{ひだり}又手^{みぎ}と與^{とも}にする也。

(二) 居許の切、五部。

6) 「擧」は小韻字。丘言切。

7) 『文選』卷8「捷鱗掉尾」李善注「郭璞曰、捷、擧也、鱗、背上鬣也、善曰、……、捷、巨言切、掉、徒釣切」。

8) 小雅・都人士「彼君子女、卷髮如蠶」、箋「蠶、螿蟲也、尾末捷然、似婦人髮末曲上卷然」、釋文(通志堂本)「末捷、莫言反、又音虞、漢書音義云、擧也、又渠偃反、一音其蹇反」(「莫」、宋刻宋元遞修本「其」に作る)、黃焯『彙校』「莫字誤、宋本作其、阮云、小字本、相臺本、十行本所附亦皆作其、虞字宋本已誤、盧本改作虞」。

9) 司馬相如傳上。顏師古注「捷、擧也、鱗、魚背上鬣也、掉、搖也、捷音鉅言反、掉音徒釣反」。

10) 玄應『一切經音義』(二十五卷本)卷16鼻奈耶律第五卷「趕尾」下に「巨言反、通俗文、擧尾走曰趕、律文作捷、非體」。二篇上(38b)走部「趕」段注は「衆經音義」を引き「通俗文曰、擧尾走曰捷、律文作趕、馬走也」とする。明藏二十六卷本(『訓讀說文解字注』金冊二篇下齒部注(13)によれば段玉裁が依った本)に依るものか。

11) 『隸釋』卷5漢成陽令唐扶頌「遂與無為之治、優賢颺歷、表讜絀惡、……」。十三篇下(8a)風部「颺、風所飛揚也」。

12) 盤庚下「今予其敷心腹腎腸、歷告爾百姓于朕志」、偽孔傳「布心腹、言輪誠於百官、以告志」。堯典「虞書」疏に「心腹腎腸曰憂腎腸」阮元校勘記に「孫志祖云、憂腎腸三字乃優賢揚之訛、優賢揚歷語見魏志管寧傳及左思魏都賦、又隸釋載漢成陽令唐扶頌亦有優賢颺歷之文。『三國志』魏志管寧傳「優賢揚歷、垂聲千載」注に「今文尚書曰、優賢揚歷、謂揚其所歷試、左思魏都賦曰、優賢著于揚歷也。『文選』卷6魏都賦「優賢著於揚歷」李善注に「尚書盤庚曰、優賢揚歷、歷、試也」。

13) 三篇上(39a)鼻部「與、黨與也」段注「黨當作攢、攢、朋群也、與當作与、与、賜予也」。

（三）小徐，此の四字有り。按ずるに「輿」¹⁴⁾は即ち「昇」。轉寫して之を改む。『左傳』「五人をして輿を輿きて己に從はしむ」¹⁵⁾は、「昇」の段借也¹⁶⁾。「昇」なる者は「共に擧ぐる也」¹⁷⁾。「共」なる者は一人に非ざるの辭也。「擧」の義亦た或いは訓じて「昇」と爲す。俗に別に「擧」に作りて『說文』に屬入す。音「以諸の切」¹⁸⁾古へに非ざる也。

掀，擧出也^(一)，从手欣聲^(二)，春秋傳曰，掀公出於淖^(三)，

掀，擧げて出す也，手に従ふ，欣の聲，春秋の傳に曰く，公を掀げて淖より出すと，

（一）「掀」の言は「軒」¹⁹⁾也。

（二）虚言の切，古音は十三部に在り，虚斤の切。²⁰⁾

（三）成十六年『左傳』の文。釋文に曰く「穀を捧げ之を擧ぐれば則ち公軒起する也，徐，許言の反，一に曰く掀は引也，胡根の反」と。²¹⁾○又た按ずるに陸『字林』を引きて云く「火氣也」と。蓋し呂氏見る所の昭十八年『左傳』「火の掀がる所を^{めく}行る」に作り，今本「掀」に作ると同じからず。²²⁾亦た火氣高く擧がるを謂ふ也。

揭，高擧也^(一)，从手曷聲^(二)，

揭，高く擧ぐる也，手に従ふ，曷の聲，

（一）『詩』に見ゆる者は，匏有苦葉の傳に「揭は裳を^{かか}褻ぐる也」²³⁾と曰ひ，碩人の傳に「揭揭

14) 十四篇上(40a)車部「輿，車輿也」。

15) 哀公十六年傳。また哀公十五年傳に「太子與五人介，輿輿從之」。

16) とともに「以諸切，五部」。

17) 三篇上(39a)昇部「昇」說解。

18) 十二篇上(39a)「擧」字段注(p.75)參照。

19) 十四篇上(37b)車部「軒，曲輻藩車也」段注「許於藩車上必云曲輻者，以輻穹曲而上，而後得言軒，凡軒擧之義引申於此，……，虚言切，十四部」。

20) 今韻古分十七部表（『六書音均表』一）では虚言切（元韻）は十四部，虚斤切（欣韻）は十三部。古十七部諧聲表（『六書音均表』二）では「欣」の聲符斤聲は十三部。八篇下(20a)欠部「欣」は「許斤切，十三部」。

21) 「乃掀公以出於淖」杜注「掀，擧也」釋文「掀公，徐許言反，云，捧穀擧之，則公軒起也，一曰，掀，引也，胡根反，一音虚斤反，字林云，擧出也，火氣也，又丘近反」。

22) 「行火所掀」杜注「掀，炙也」。

23) 邶風。「深則厲，淺則揭」傳。釋文「則揭，苦例反，褻衣渡水也」「揭揭衣，並苦例反，下同，一云，下揭字音起例反，一本作揭褻衣」。

は長き也²⁴⁾と曰ひ、蕩の傳に「掲は根を見る兒²⁵⁾と曰ふ。

(二) 去例の切、又た基竭の切、十五部。

𢦏、上舉也、出休爲拯、从手丞聲、易曰、拯馬壯吉^(一)、𢦏、拯或从登^(二)、

拯、上舉する也、^{アキ}休を出すを拯と爲す、手に从ふ、丞の聲、易に曰く、^{すく}拯ふに^{さか}馬壯んなれば吉と、^登登、拯或いは登に从ふ、

(校)「𢦏」、二徐「𢦏」に作る。二徐「出休爲拯」四字無し。「丞」、二徐「升」に作る。「拯」、二徐「拊」に作る。

(一) 各本篆「𢦏」に作り、解に「^休休²⁶⁾を出すを拯と爲す」四字無く、「丞聲」を「升聲」に作り、「拯馬」を「拊馬」に作る。今皆な正す。『易』明夷の釋文に曰く「丞、音拯救の拯。説文に云く、舉也と。子夏拊に作る。字林に云く、拊は上舉、音承」と²⁷⁾。然らば則ち『説文』「拯」に作り、『字林』「拊」に作る。呂の時に在りては古今字爲り。陸引きて「上」字無し。而して李羽獵の賦に注し引きて之れ有り。²⁸⁾ 李、謝靈運の鄴中集に擬ふる詩²⁹⁾、曹植の七啓³⁰⁾、潘勗の九錫文³¹⁾、傅亮の張良廟を修する教³²⁾、王巾の頭陀寺碑³³⁾に注し皆な『説文』「溺を出すを拯と爲す」を引く。是れ古本確かに此の四字有り。『方言』に曰く「^躡躡、拊、拔也。^{アキ}休^いを出すを拊と爲し、^い火を出すを^躡躡と爲す³⁴⁾と。『方言』の書字多く轉寫を經、改めて「拊」に作る。即ち今字を以て古字を改むるの一。抑も或いは子雲固り此くの如く作り、許之を録せざる耳。「用て拯ふに馬壯んなれば吉」、『周易』明夷六二の爻辭、其の字今「拯」に作る。陸氏徳明「丞」に作り「拯救

24) 衛風。「蒺藜掲掲」傳。釋文「掲掲、其謁反、徐居謁反、長也」。

25) 大雅。「顛沛之掲、枝葉未有害、本實先撥」傳。『毛詩故訓傳定本小箋』は「根見貌」に作る。箋「掲、蹶貌、撥猶絕也、言大木揭然將蹶枝葉、未有折傷、其根本實先絕、乃相隨俱顛拔、……」傳の疏に「掲者蹶倒之意、故以為見根貌、此顛沛之掲、正謂樹將倒拔、而已見其根、但未絕耳」、箋の疏に「傳言見根、不辨根之所見、故以掲為蹶貌、……」、釋文「之掲、紀謁反、根見貌」。阮元校勘記は「掲見根貌、小字本、相臺本同、案此正義本也」とし、釋文は「根見」に作り「見」に「賢遍反」の音を附し、疏は「見根」に作り「見」を字の如く讀むとし、テキスト及び解釋の違いはいうが、是非はいわない。

26) 十一篇上二(23a)水部「^休休、^没没也、从水人、讀與溺同」段注に「此沈溺之本字也、今人多用溺水水名字爲之、古今異字耳」。また十一篇上一(10b)水部「^溺溺、溺水、自張掖刪丹西至酒泉合黎、餘波入于流沙」段注に「按今人用爲^{休没}休没字、溺行而^{休廢}休廢矣」。

27) 通志堂本釋文「用拯、拯救之拯、注同、説文云、舉也、鄭云承也、子夏作拊、字林云、拊、上舉、音承」。宋刻宋元遞修本は「用拯」を「用承」に作る。

28) 『文選』卷8。「丞民乎農桑」李善注「聲類曰、丞亦拯字也、説文曰、拯、上舉也」。

29) 『文選』卷30。「家王拯生民」注。

30) 『文選』卷34。「探隱拯沉」注。

31) 『文選』卷35。「俾我國家拯於危墜、此又君之功也」注。

32) 『文選』卷36。「夷項定漢大拯橫流」注。

33) 『文選』卷59。「憑五衍之軾拯溺逝川」注。

34) 卷13。音義「拊、一作拯」。

の拯」と云ふ³⁵⁾は、猶ほ良「承はずして其れ隨ふ」³⁶⁾、「承は音拯救の拯」³⁷⁾と云ひ、『左傳』「智井を目し而して之を承へ」³⁸⁾、「承は拯救の拯」³⁹⁾と云ふがごとき也。葉林宗抄文淵閣宋本誤らず。通志堂、抱經堂皆な大字を改めて「拯」と爲す。殊に非なり。『集韻』「拊」「承」「攪」「拯」「丞」五形字を同じうす。⁴⁰⁾「丞」「承」は即ち諸を良、隨⁴¹⁾二卦の釋文に取る。『類篇』「丞」を「承」に作る。⁴²⁾今本『釋文』「丞」を改めて「拯」に爲り、遂に『集韻』、『類篇』の本原をして泯没せしむ。羽獵の賦「民を農桑に丞ふ」、李『聲類』「丞は亦た拯字」を引く。⁴³⁾此れ「丞」の證也。『列子』「弟子をして流れに竝ひ而して之を承はしむ」張注して「承、音拯」、『方言』を引きて「溺を出すを承と爲す」と。⁴⁴⁾此れ「承」の證也。『玉篇』に曰く「承、聲類、拊字と云ふ」と。⁴⁵⁾然らば則ち『聲類』の「丞」に作り、「承」に作るは固り考へ難し。『集韻』に曰く「承」なる者は「承」の或體と⁴⁶⁾。『玉篇』に曰く「拊、音蒸、又上聲」⁴⁷⁾と。蓋し古へ多く平聲に讀み、今則ち上聲に讀む。古音六部に在り。陸「音拯救の拯」と云ひ、『玉篇』、『廣韻』⁴⁸⁾皆な「蒸の上聲」と云ふ。反語を作さざる者は『廣韻』「韻切無し」と云ふ也。「韻切無し」なる者は此の韻字少なし。「慶」「斃」「斃」⁴⁹⁾又た皆な識り難き也。

(二)「拯」、各本「拊」に作る。今正す。丞聲、登聲皆な六部也。舛聲亦た六部。而して此の篆古へ「丞」に从ひ「登」に从ひて「舛」に从はざる者は、「丞」「登」皆な上進の意有り。形

35) 注27) 參照。

36) 六二の爻辭。阮元本は「承」を「拯」に作る。阮元校勘記「釋文、……、不承、音拯救之拯、是陸所據本作承」。

37) 良・六二の爻辭通志堂本釋文「不承、音拯救之拯、馬云舉也」。宋刻宋元遞修本同じ。

38) 宣公十二年傳。阮元本は「承」を「拯」に作る。杜注「無社意解欲入井、故使叔展視虛廢井而求拯已、出溺為拯」。

39) 宣公十二年傳通志堂本釋文「而拯、拯救之拯、注同」。宋刻宋元遞修本は「而拯」を「而承」に作る。

40) 上聲下「四十二〇拊承攪拯丞、舊說無切語、音蒸之上聲、說文上舉也、引易拊馬牡、古或作承、攪、拯、丞」。

41) 隨卦に「丞」「承」の釋文は無い。明夷の誤りか。

42) 十二上「拊承攪拯、蒸上聲、說文上舉也、引易拊馬牡吉、或作承攪拯、承攪、又除庚切、揆也、拊、又諸仍切、取也、又辰陵切、拊攪、又書蒸切、又常證切、承、又諸應切、……」。

43) 注28) 參照。

44) 黃帝篇。

45) 『大廣益會玉篇』手部第六十六「拊、音蒸、又上聲、救助也、攪拯、並同上、承、聲類云拊字」。

46) 平聲四・十六蒸「承、音承、辰陵切、說文奉也、受也、又姓、或作承、承、承」、また去聲下・四十七證（諸應切）小韻に「承承、承鄉、漢侯國名、或作承」。

47) 注45) 參照。

48) 『廣韻』上四十二拯韻「拯」下に「無韻切、音蒸上聲」という。「拯」小韻には「拯」のほか、「拊」「攪」「承」「承」四字が収められている。

49) 『廣韻』上四十二拯韻所取の字は「拯」小韻の五字を除けば、この三字のみ。「慶」は丑拯切、「斃」は其拯切、「斃」は色慶切。

聲中に會意有り。經典「登」,「𢇛」に作るは皆な段借字。「𢇛」⁵⁰⁾の本義,實に「上舉す」に於いて涉る無し。

𢇛, 舉救之也^(一), 从手辰聲^(二), 一曰奮也^(三),

振, 舉げて之を救ふ也, 手に従ふ, 辰の聲, 一に曰く, 奮也,

(校) 二徐, 「之」字無し。

(一) 「之」字, 『韻會』⁵¹⁾に依りて補ふ。諸史籍云ふ所の「振給」、「振貸」は是れ其の義也。凡そ振濟は當に此の字に作るべし。俗に「賑」に作るは非也。『匡謬正俗』之を言ひて詳かなり。⁵²⁾

(二) 章刃の切, 十三部。

(三) 此の義は則ち「震」と略ほ同じ⁵³⁾。采芑の傳に「入るを振旅と曰ふ」⁵⁴⁾と曰ひ, 振鷺の傳に「振振は羣飛する兒」⁵⁵⁾と曰ひ, 七月の傳に「沙雞羽成りて之を振訊す」⁵⁶⁾と曰ふは, 皆な此の義。麟止、殷其雷の傳に「振振は信厚き也」⁵⁷⁾と曰ふは則ち此の義の引申, 蓋し未だ信厚ならずして能く奮ふ者有らず。

扛, 橫關對舉也^(一), 从手工聲^(二),

扛, 横ざまに關きて對舉する也, 手に従ふ, 工の聲,

(一) 「木を以て横ざまに門戸を持する」を「關」と曰ふ⁵⁸⁾。凡そ大いなる物にして兩手もて之を對舉するを扛と曰ふ。項羽「力能く鼎を扛ぐ」⁵⁹⁾は鼎に鼎⁶⁰⁾有るを謂ひ, 「木を以て横ざまに鼎耳を貫きて」其の兩端を「舉ぐる」也。即ち横木無くして兩手もて之を舉ぐるも亦た「扛」

50) 十四篇上(35b)斗部「𢇛, 十合也」。二徐は「合」を「龠」に作る。

51) 去聲十二震・震(之刃切)小韻「振, 說文, 舉救之也, 从手辰聲, 一曰奮也, ……」。

52) 卷7「振, 許慎說文解字曰, 振, 舉救也, 諸史籍所云振給、振貸其義皆同, 盡當為振字, 今人之作文書者, 以其事涉貨財, 輒改振為賑, 按說文解字云富也, 左思魏都賦云, 白藏之藏, 富有無隄, 同賑大內, 控引世資, 此則訓不相干, 何得輒相混雜, 言振給、振貸者, 並以其飢饉窮厄, 將就困斃, 故舉救之, 使得存云耳, 寧有富事乎」。

53) 十一篇下(10b)兩部「震, 劈歷振物者」。『左傳』隱公九年經疏は『說文』を引いて「振」を「震」に作る。段注に「振與震疊韻, 春秋正義引作震物爲長, 以能震物而謂之震也, 引申之, 凡動謂之震」。また, 四篇上(30b)奮部に「奮, 羣也」, 四篇上(21a)羽部に「羣, 大飛也」

54) 小雅。「振旅闐闐」傳。

55) 周頌。「振鷺于飛」傳。

56) 豳風。「六月莎雞振羽」傳。

57) 周南・麟之趾「振振公子」傳, 召南・殷其雷「振振君子」傳。

58) 十二篇上(13a)門部「關, 以木橫持門戸也」。

59) 『史記』項羽本紀。

60) 七篇上(36a)鼎部「鼎, 目木橫貫鼎耳舉之, 从鼎門聲, ……」。

と曰ふ。即ち兩人横木を以て一物を對舉するも亦た「扛」と曰ふ。『字林』「捎、擱、^かは昇く也」⁶¹⁾。『匡謬正俗』に曰く「音譌、故に扛を謂ひて剛と爲す。擱字を造る者有るは、故より穿鑿爲る也」⁶²⁾と。西京の賦「鼎を舡ぐ」に作る⁶³⁾。「舡」は即ち「舡」⁶⁴⁾。魏大饗碑「鼎を舡ぐ」に作る⁶⁵⁾。「舡」なる者は「鼎を扛ぐ」の段借字也。

(二) 古雙の切、九部。

扮、握也^(一)，从手分聲，讀若粉^(二)，

扮、握る也，手に从ふ，分の聲，讀みて粉の若くす，

(校)「粉」，小徐「蚘」に作る。

(一) 大玄に曰く「地は則ち虚三以て天の十八^{あは}を扮する也」⁶⁶⁾と。「扮」は猶ほ「并」のごとき也。

(二) 房吻の切、十三部。

矯、舉手也^(一)，从手喬聲^(二)，一曰，矯，擅也^(三)，

矯、手を舉ぐる也，手に从ふ，喬の聲，一に曰く，矯は擅也，

(一) 之を引申し，凡そ舉ぐるは皆な矯と曰ふ。古へ多く「矯」⁶⁷⁾を段りて之と爲す。陶淵明曰く「時に首を矯げて遐觀す」⁶⁸⁾と。王逸楚辭に注して曰く「矯は舉也」⁶⁹⁾と。

(二) 居少の切、二部。

(三) 「擅は專也」⁷⁰⁾。凡そ「矯詔」⁷¹⁾は當に此の字を用ふべし。

61) 『集韻』去四十二宕・鋼(居浪切)小韻、『類篇』十二上手部の「擱」項に「字林、捎、擱、昇也」。『廣韻』去四十二宕・鋼(古浪切)小韻「擱」項に「捎、擱、昇也，出字林」。

62) 卷6剛扛「或問曰、吳楚之俗、謂相對舉物爲剛、有舊語否、答曰、扛、舉也、音江、字或作舡、史記云、項羽力能扛鼎、張平子西京賦云、烏獲扛鼎、並是也、彼俗音訛、故謂扛爲剛耳、既不知其義、乃有造擱字者、固爲穿鑿也」。

63) 『文選』卷2。胡刻本、四部叢刊本は「舡」を「扛」に作る。胡刻本李善注に「扛與舡同、古尙切」(四部叢刊六臣注本は「舡」を「舡」に作り、「尙」を「龐」に作る)、胡克家『考異』に「案、扛當作舡、善注云、扛與舡同、謂引說文之扛與正文之舡同也、蓋善舡、五臣扛、而各本亂之」。

64) 四篇下(57a)角部「舡、舉角也」段注に「假借爲扛字、魏大饗碑、……、西京賦、……、是也、舡亦舡字」。

65) 『隸釋』卷19。「上索踰高、舡鼎緣幢」。

66) 太玄數。集注本同じ、四庫全書本(揚子雲集)「之」字無し。集注に「扮、房吻切、諸本作扮天之十八、宋有之字」。「宋」は漢の宋衷。また、『校釋』に「集注本、扮天下有一之字、並曰、諸本作扮天之十八、宋有之字爲佳」。

67) 五篇下(22b)矢部「矯、揉箭箝也」。「矯」字段注は「凡云矯詔者、本不然而云然也」とする。

68) 歸去來兮辭(『陶淵明集』卷5、『文選』卷45)。

69) 『楚辭章句』卷4九章・惜誦「矯茲媚以私處兮」注

70) 十二篇上(42a)手部「擅」說解。p.86 參照。

71) 例えば『漢書』佞幸傳の石顯の傳に「顯故投夜還、稱詔開門入。後果有上書告顯、顯命矯詔開宮門、天子聞之、笑以其書示顯」。

𢶏，自關巴西凡取物之上者爲橋捎^(一)，从手肖聲^(二)，

捎，關自り巴西は凡そ物の上を取る者を橋捎と爲す，手に从ふ，肖の聲，

(校)「巴」，小徐「以」に作る。

(一)「物の上を取る」は物の顛きを取るを謂ふ也。「捎」の言は「梢」^{サウ}也。『方言』に曰く「橋捎^{ケウサウ}は選也。關自りして西、秦晉之間は凡そ物の上を取るは之を橋捎と謂ふ」⁷³⁾と。按ずるに今俗語に云ふ「捎帶」は是れ也。西京の賦の注に曰く「擗^{サウ}なる者は「之を捎取す」⁷⁴⁾と。考工記「其の藪を捎す」⁷⁵⁾、「捎溝」⁷⁶⁾，注に「捎は除也」と曰ふは，其の引申の義。

(二) 所交の切，二部。

𢶑，褻也^(一)，从手隹聲^(二)，

攤，褻也，手に从ふ，隹の聲，

(校)「褻」，二徐「抱」に作る。

(一)各本「抱也」に作る。今正す。「抱」なる者は『説文』の或「攄」字也⁷⁷⁾。「褻」は衣部に見ゆ。「褻く也」⁷⁸⁾「褻」を改めて「抱」と爲すは大いに許例を失す。公食大夫禮「簠梁を擗す」，注に云く「攤は抱也」と⁷⁹⁾。吳語「官帥，鐸を攤す」注に云く「攤は抱也」と⁸⁰⁾。『漢書』注に曰く「南

72) 六篇上(13a)木部「梢，梢木也」段注に「未詳，廣韻曰，梢，船舵尾也，又枝梢也，此今義也，釋木曰，梢，梢擗，郭云，梢音朔，按梢擗字，蓋本從手作捎」「所交切，二部」。

73) 卷2。郭注「此妙擇積聚者也」

74) 『文選』卷2。「超殊擗飛颺」李善注。

75) 輪人「以其圍之防，捎其藪」注に「捎，除也，防，三分之一也，鄭司農云，捎讀爲桑螵蛸之蛸，藪讀爲蜂藪之藪，謂藪空壺中也，玄謂此藪徑三寸九分寸之五，壺中當輻菑者也，蜂藪者猶言趨也，藪者眾輻之所趨也」釋文に「捎，音蕭」。阮元校勘記に「釋文、唐石經捎字皆從手，諸本同，匠人……，賈疏引此作梢其藪，字從木，當據正，唐宋人作書，木旁往往變從手○案从扌、从木二字説文皆有之，難以猝定」。『周禮漢讀考』卷6は「捎」を「梢」に作り「梢，各本作捎，今案匠人梢溝，亦讀如蛸，與此除義同，然則此亦當從木，俗謂木末爲梢，凡以末探取物，皆得曰梢，是其訓也」という。

76) 匠人「梢溝三十里而廣倍」。阮元本は「捎」を「梢」に作る。注に「鄭司農云，梢讀爲桑螵蛸之蛸，蛸謂水激齧之溝，……」疏に「先鄭云，……，上云，梢其藪，亦讀從螵蛸之蛸，同是梢齧之義，故同讀從之也」釋文に「梢溝，劉音蕭，注蛸，一音色交反」。

77) 十二篇下(33b)手部「攄，引壑也，……，抱，攄或从包」。段注に「後人用抱爲褻褻字，蓋古今字之不同如此」。

78) 八篇上(56a)。段注に「今字抱行而褻廢矣」。

79) 阮元本は「擗」を「攤」に作る。段注本は「玉篇」引く『儀禮』(注82)参照)に同じ。校勘記に「監本……，攤，誤作擗」。

80) 「行頭皆官帥，攤鐸拱稽」。明道本は「帥」を「師」に作る。韋昭注「三君皆云，官帥，大夫也，……，攤猶抱也」(董增齡『正義』本「猶」字無し)。徐元誥『集解』は「宋庠本官帥作官帥」とし「作官帥，非是」という『經義述聞』の説を引き、「補音反以師爲非，失之」とする。

方小兒を抱くを謂ひて雍樹と爲す⁸¹⁾、「雍」なる者は「擁」の段借字。

(二) 於隴の切、九部。按ずるに『玉篇』「擧」に作る⁸²⁾。蓋し古體也。之を抱けば則ち物必ず前に在り。故に「隴」を上にし「手」を下にす。

擧、染也^(一)、从手奐聲^(二)、周禮曰、六曰擧祭^(三)、

擧、染也、手に从ふ、奐の聲、周禮に曰く、六に曰く、擧祭と、

(校) 二徐、「擧」を「擧」に作り、「奐」を「需」に作る。大徐、「周禮」下「曰」字無し。

(一) 繪を染め色を爲すが如き也。⁸³⁾

(二) 而泉の反、十四部。

(三) 各本篆を「擧」に作り、解を「需の聲」に作り、『周禮』を引きて「擧祭」に作る。今正す。古音、奐聲は十四部に在り、需聲は四部に在り。其の音畫然として分別せらる。後人は乃ち或いは其の偏旁を淆亂し本と「奐」に从ふ者譌りて「需」に从ひ而して音是に由りて亂る。『周禮』大祝「九祭、六に曰く、擧祭」⁸⁴⁾。士虞禮⁸⁵⁾、特牲饋食禮⁸⁶⁾、少牢饋食禮⁸⁷⁾、有司徹⁸⁸⁾四篇の經文凡

81) 夏侯嬰傳「漢王……、常蹶兩兒棄之、嬰常收載行、面雍樹馳」顏師古注引く蘇林說。

82) 『大廣益會玉篇』手部六十六「擧、於勇切、儀禮云、擧簠梁、擧、抱也、作擁同、擧、同上」。

83) 十一篇上二(39a)水部「染、目繪染爲色」。

84) 春官。阮元本は「擧」を「擧」に作り、校勘記は『周禮漢讀考』(注104)参照を引く。注に「杜子春云、……、擧祭、擧讀爲虞芮之芮」校勘記「岳本嘉靖本同、閩監毛本爲誤謂、漢讀考云、此讀爲當作讀如、擬其音如芮耳、經注擧字皆擧之誤」、釋文「擧祭、而泉反、一音而劣反、劉又而誰反」。

85) 4例。4例とも「擧」に作る。「尸取奠左執之、取菹擧于醢、……」(阮元卷42・9a)釋文「擧、韋悅反、劉而玄反、又而誰反」黃焯『彙校』「韋悅、宋本作人悅」、「尸左執爵、右取肝擧鹽、……」(阮元卷42・12a)、「祝取肝擧鹽、……」注「今文無擧鹽」(阮元卷42・12b)、「尸左執爵、取脯擧醢祭之」(阮元卷43・8a)。

86) 4例。「尸左執觶、右取菹、擧于醢、……」注「擧醢者染於醢」(阮元本卷45・4b)阮元校勘記「右取菹擧于醢、釋文無于字、與注合、按公食大夫擧于醢注云、今文無于、此經不疊今文古文、是今古俱無于也、又公食有于字、故注但釋擧義云、擧猶染也、此經無于字、故注補之云、擧醢者染於醢」釋文「擧醢、如悅反、劉而玄反、又而誰反、後同」、「尸左執角、右取肝、擧于鹽、……」(阮元卷45・7b)、「祝左執角、右取肝、擧于鹽、……」(阮元卷45・9a)、「肝從、左執爵、取肝擧于鹽、……」(阮元卷45・11b)。

87) 4例。「尸取韭菹辯擧于三豆、……」(阮元卷48・5a)釋文「擧于、如悅反、劉而誰反」黃焯『彙校』「悅、宋本作悅、是也、如悅即集韻之儒劣」、「尸左執爵、右兼取肝、擧于俎鹽」(阮元卷48・8b)、「祝取菹、擧于醢、……」(阮元卷48・11a)、「祝取肝、擧于鹽、……」(阮元卷48・11a)。

88) 8例。「尸……、左執爵、右取韭、菹擧于三豆、……」(阮元卷49・11b)釋文「擧、如悅反、劉而誰反」黃焯『彙校』「宋本作人悅反」、「尸左執爵、受燔、擧于鹽、……」(阮元卷49・13a)、「設于豆東侑坐、左執爵右取菹、擧于醢、……」(阮元卷49・14a)、「主婦坐、左執爵右取菹、擧于醢、……」(阮元卷49・19b)、「賓坐、左執爵右取脯、擧于醢、……」(阮元卷50・1b)、「尸兼取燔、擧于鹽、……」(阮元卷50・14a)、「主人左執爵、右取菹、擧于醢、……」(阮元卷50・16a)、「主婦升筵坐、左執爵右取菹、擧于醢、……」(阮元卷50・18a)。

そ「擗」字を用ふること二十⁸⁹⁾。唐石經『周禮』、士虞皆「擗」に作り、特牲、少牢、有司皆な「擗」に作る。參差として乖異す。此れ經の字一ならざるに非ず。乃ち『周禮』、士虞の經、淺人妄りに改むる也。郭璞「而沿の反」⁹⁰⁾、李善「而緣」の反⁹¹⁾、劉昌宗「而玄の反」⁹²⁾、陸德明「而泉の反」⁹³⁾は、皆な奘聲の正音也⁹⁴⁾。杜子春「讀みて虞芮の芮の如くす」⁹⁵⁾、郭璞「而悅の反」⁹⁶⁾、劉昌宗「而誰の反」⁹⁷⁾、顔師古「如閔の反」、陸德明「而劣の反」は、皆な奘聲の音轉也⁹⁸⁾。古音十四、十五部取も相ひ近きの理也。今則ち『周禮』、禮經、『漢書』、子虛の賦の注皆な誤りて「需」に従ふ。『玉篇』に「擗」「而主の切」⁹⁹⁾と。『廣韻』裏韻「擗」に作りて「而主」を切し、薛韻「擗」に作りて「如劣」を切す。¹⁰⁰⁾其の本と一字爲るを知らず。而して『五經文字』に云ふ「擗、如悅の反、字書此の字無し。禮經に見ゆ」、「擗、汝主の反、周禮に見ゆ」¹⁰¹⁾と。是れ則ち唐の開成石經正に張參の説を用ふ。故に『周禮』は『儀禮』と字を異にす。何を以て禮經中に就き士虞 他篇と又た字を異にするかを知らざる也。張氏云く、『周禮』「擗」に作り、「汝主の反」と。今按ずるに『周禮』釋文に「而泉の反、一音而劣の反、劉又た而誰の反」と曰ひ、絶えて「汝主」一反無し。以て陸氏『周禮』の本と「擗」に作るを證すべからざらんや。士虞禮の釋文に「如悅の反、劉而玄の反、又た而誰の反」と曰ひ、特牲、少牢、有司と音義皆な同じ。亦た「而主の反」と言はず。又た以て士虞の本と「擗」に作るを見るべからざらんや。其の字書に「擗」字無しと云ふは則ち其の據る所の『説文』已に俗改の本爲り、「擗」有りて「擗」無し。而して『説文』古本の「擗」有りて「擗」無きを知らざる也。禮經の注に曰く「擗は染

89) 士虞禮、特牲饋食禮、少牢饋食禮がそれぞれ4例、有司徹が8例で計20(注85)～88)参照。「擗」は公食大夫禮にも2例見える。「賓升席，坐，取韭菹，以辯擗于醢，……」注「擗猶染也，今文無于」(阮元卷25・11b)釋文「擗于，人悅反，劉而玄反，又而誰反」，「賓興受，坐祭，掬手，扱上鉶以枲，辯擗之，……」(阮元卷25・12a))

90) 『史記』司馬相如傳上・子虛賦「割鮮染輪」集解「郭璞曰，……，染，擗也，音而沿反，又音而悅反」。

91) 『文選』卷8・子虛賦「割鮮染輪」李善注「李奇曰，……，染，擗也，……，善曰，擗，搯也，擗，而緣切，搯，一頓切」。

92) 公食大夫禮(注89)参照)、士虞禮(注85)参照)、特牲饋食禮(注86)参照)釋文。

93) 『周禮』春官・大祝釋文。注84)参照。

94) 「而沿反」「而緣反」「而泉反」は仙韻、十四部だが、劉昌宗「而玄反」は先韻なので十二部になる。

95) 『周禮』春官・大祝鄭注引。注84)参照。

96) 『史記』司馬相如傳『集解』引。注90)参照。

97) 『儀禮』士虞禮、特牲饋食禮、少牢饋食禮、有司徹釋文引。注85)～88)参照。

98) 「讀如虞芮之芮は祭韻、「而悅反」「如閔反」「而劣反」は薛韻、「而誰反」は脂韻で、いずれも十四部。

99) 『大廣益會玉篇』手部六十六「而專、而誰、而主三切，説文云，染也，周禮九祭六曰擗祭，鄭司農云，擗祭以肝肺菹擗鹽醢中以祭也」。

100) 乳(而主切)小韻に「擗，擗取物也」，夔(如劣切)小韻に「擗，括也」。「擗」は上平六脂・蕤(儒佳切)小韻(「擗，染也，又而樹切」)、去十遇・孺(而遇切)小韻(「擗，擗莖，手進物也」)、去五十候・梲(奴豆切)小韻(「擗，搆擗，不解事」)にも見える。

101) 卷上・手部。「擗」字注「字書」上に「案」字有り。

也」¹⁰²⁾、李奇子虛の賦の注に曰く「染は揆也」¹⁰³⁾と。¹⁰⁴⁾

揄、引也^(一)、从手兪聲^(二)、

揄、引也、手に従ふ、兪の聲、

(一)『漢』郊祀歌に曰く「神の揄くや、壇宇に臨む」、師古云く「揄は引く也」¹⁰⁵⁾。『史記』「長袂を揄るふ」¹⁰⁶⁾、『廣韻』「揄揚は詭言也」¹⁰⁷⁾、皆な其の引申の義。大雅「或いは春き或いは揄む」¹⁰⁸⁾、「揄」を段りて「𠂔」¹⁰⁹⁾と爲す也。

(二)羊朱の切、古音は四部に在り。¹¹⁰⁾

擥、擥摟^(一)、不正也^(二)、从手般聲^(三)、

擥、擥摟は正しからざる也、手に従ふ、般の聲、

(一)逗。

(二)『廣韻』「擥摟は宛轉也」¹¹¹⁾は今の義也。

(三)薄官の切、十四部。

102) 公食大夫禮「以辯擣于醢」注に「擣猶染也」、特牲饋食禮「擣于醢」注に「擣醢者染於醢」。

103) 注91)参照。

104) 『周禮漢讀考』卷3「六曰擣祭、注……」に「經注擣字、今本作作擣、其誤自唐至今矣、凡奠聲之字在第十四元寒部、音轉入第十五脂微部、需聲之字在第四侯部、音轉入第五魚虞部、而後人作偏旁多亂之、此其大較也、杜子春擣讀如虞芮之芮、說文手部、擣、染也、从手奠聲、周禮曰、六曰擣祭、攷儀禮擣字屢見、開成石經以下、特牲、少牢作擣不誤、公食大夫、士虞及周禮誤作擣、以子春讀如芮、儀禮、周禮釋文皆曰、而泉反、一音而劣反、劉又而誰反、證之、則其字定為奠聲、非需聲、今本史漢司馬相如傳注、文選子虛賦注、玉篇手部、廣韻上聲九麌皆譌作擣、而今本說文作擣、則併其源妄改之、以致五經文字云、其原本改之以致五經文字云、擣、字書無此字、見禮經、然則當張參時、說文字林玉篇皆已有擣無擣矣、今玉篇引說文擣染也、蓋自顧野王孫強所據說文已譌、唐韻因其需聲、切以而主、徐鼎臣因之、自陸德明以前、形雖譌、未聞有而主切之音、玉篇而主切、蓋亦顧氏之舊、廣韻麌韻作擣、薛韻作擣、則截然二字矣」。

105) 『漢書』禮樂志・郊祀歌・華燁燁十五。

106) 貨殖列傳。集解「徐廣曰、揄音臾」。

107) 上平十虞・逾(羊朱切)小韻「揄、揄揚、詭言也、又動也、說文引也」。「揄」は下平十八尤・猷(以周切)小韻、下平十九侯・頭(度侯切)小韻、上五厚・菴(徒口切)小韻にも見える。

108) 生民。傳「揄、抒白也」。釋文「揄、音由、又以朱反、抒白也、說文作𠂔、弋紹反」。

109) 七篇上(66a)白部「𠂔、抒白也、从爪白、詩曰、或簸或𠂔」段注「生民詩曰、或春或揄、或簸或蹂、毛云、揄、抒白也、然則揄者、𠂔之段借字也」、また「以沼切、今語也、古音讀如由、釋文引說文弋紹切、音隱已如此」。

110) 古十七部諧聲表で兪聲は四部。今韻古分十七部表で「羊朱切」(十虞)は五部だが、『廣韻』の「度侯切」「徒口切」は四部。「以周切」は三部

111) 上平二十五寒・灘(他干切)小韻「擥、擥摟、宛轉」。澤存堂本は「宛」を「婉」に作る。余廼永校註本に校勘記無し。

獲，擊獲也，从手獲聲^(一)，一曰布獲也^(二)，一曰握也^(三)，

獲，擊獲也，手に从ふ，獲の聲，一に曰く，布獲也，一に曰く，握也，

(校) 大徐，「从手獲聲」，「握也」下に在り。小徐，「握也」下に「一曰搯也」四字有り。

(一) 一號の切，古音は五部に在り。¹¹²⁾

(二) 此れ即ち今の布獲の字也。劉逵，吳都の賦に注して曰く，「布獲は遍く滿つる兒」¹¹³⁾と。

(三) 「握」なる者は「搯り持つ也」²³⁶⁾。西京の賦「獬狴を獲る」，薛云く「獲は之を握り取るを謂ふ也」と。今本「握」を「掘」に譌る。¹¹⁴⁾玄應誤らず¹¹⁵⁾。

拊，拊手也^(一)，从手弁聲^(二)，

拊，手を拊つ也，手に从ふ，弁の聲，

(一) 「拊は拊づる也」¹¹⁶⁾，「拊は拊つ也」¹¹⁷⁾。此れ但だ「拊」と言ふのみならず，「手を拊つ」と言ふ者は，兩手相ひ拊つを謂ふ也。今人「歡拊」と謂ふは是れ也。『漢書』¹¹⁸⁾、吳都の賦¹¹⁹⁾皆な「拊射」と云ふ。孟康曰く，「手もて搏つを拊と爲す」¹²⁰⁾と。此れ則ち兩人手もて相ひ搏つを謂ふ也。

(二) 皮變の切，十四部。俗に「拊」に作る¹²¹⁾。

擲，專也^(一)，从手壹聲^(二)，

擲，專也，手に从ふ，壹の聲，

(一) 「專」¹²²⁾ 當に「擲」に作るべし。「擲」なる者は「壹也」¹²³⁾。

112) 今韻古分十七部表では「一號切」(二十陌)は十六部，古十七部諧聲表では獲聲は五部。『六書音均表』一・第五部第十六部入聲分用説に「第五部入聲與第十六部入聲，周秦漢人分用，晉宋而下多以第五部入聲之字韻入於第十六部，鄭氏合藥陌錫爲一部，未爲審矣」。

113) 『文選』卷5 吳都賦「布獲臯澤」劉逵淵林注。『晉書』文苑傳・左思傳に「及賦成，時人未之重，……，(皇甫)謐稱善，爲其賦序，張載爲注魏都，劉逵注吳蜀而序之」，『文選』卷4 三都賦「劉淵林注」注に「三都賦成，張載爲注魏都，劉逵爲注吳蜀，自是之後，漸行於俗也」。

114) 『文選』卷2。胡刻本薛綜注「獲謂掘取之也」，四部叢刊本同じ。

115) 玄應『一切經音義』卷12 修行道地經第五卷「獲草」下、卷13 修行本起經下卷「獲持」下、いずれも「於號反，廣雅，持也，謂握取之也」。

116) 十二篇上(30b)手部。

117) 十二篇上(30a)手部。

118) 哀帝紀・贊に「時覽卞射武戲」。『漢書』諸本は拊を「卞」に作る。『文選』李善注は引いて「卞」を「拊」に作る。(下注参照) 顔注に「蘇林曰，手搏爲卞，角力爲武戲也」。

119) 『文選』卷5。「拊射壺搏」李善注に「漢書贊曰，元帝時覽拊射，孟康曰，手搏爲拊」。

120) 『文選』李善注引。上注参照。

121) 『漢書』(注118) 参照)のほか，四部叢刊本『文選』吳都賦も「拊射」を「拊射」に作る。

122) 三篇下(30b)寸部「專，六寸簿也，……，一曰專，紡專」。

123) 十二篇下(18b)女部「擲」説解。段注「壹下云，擲也，與此爲轉注，凡擲壹字古如此作，今則專行而擲廢矣，專者，六寸簿也，紡專也」。

（二）時戰の切，十四部。

𢦏，度也^(一)，从手癸聲^(二)，

揆，度る也，手に从ふ，癸の聲，

（校）二徐，「度」を「葵」に作る。

（一）各本「葵也」に作る。今『六書故』據る所の唐本に依りて正す¹²⁴⁾。「度」なる者は「法制也」¹²⁵⁾。因りて以て揆度の度と爲す。今音去入に分る¹²⁶⁾。古へ二無き也。小雅「天子之^{これ}を^{はか}葵る」傳に「葵は揆る也」と曰ふ¹²⁷⁾は、「葵」を段りて「揆」と爲すを謂ふ也。

（二）求癸の切，十五部。

𢦏，度也^(一)，从手疑聲^(二)，

擬，度る也，手に从ふ，疑の聲，

（一）今の所謂る「揣度」¹²⁸⁾也。

（二）魚己の切，一部。

𢦏，減也^(一)，从手員聲^(二)，

損，減る也，手に从ふ，員の聲，

（一）水部に曰く「減」なる者は「損る也」¹²⁹⁾。二篆轉注爲り。

（二）穌本の切，十三部。

𢦏，縱也^(一)，从手乙聲^(二)，

失，縱也，手に从ふ，乙の聲，

（一）「縱」なる者は「緩す也，一に曰く，捨つ也」¹³⁰⁾。手に在り而して逸去するを「失」と爲

124) 卷14・人七・手部に「揆，巨癸切，度也（説文葵也，唐本度也）」。

125) 三篇下(20a)又部「度」説解。

126) 『廣韻』では，去十一暮・渡（徒過切）小韻に「度，法度，又姓，……，又徒各切」，入十九鐸（徒落切）小韻に「度，度量也，又音渡」。

127) 采菽。

128) 例えば『閔微草堂筆記』卷15 姑妄聽之一に「其揣度人情，投其所好，……」。

129) 十一篇上二(41b)水部「減」説解。

130) 十三篇上(6b)「縱」説解。二徐は「捨」を「舍」に作る。段注に「各本作舍也，由俗以舍捨通用也，今正，捨者釋也」。

す。兔部に曰く「逸は失也」¹³¹⁾と。古へ多く段りて逸去の逸と爲し¹³²⁾、亦た段りて淫泆の泆と爲す¹³³⁾。

(二) 甲乙の乙を以て聲と爲す。式質の切、十二部。

𢶇, 解𢶇也^(一), 从手兌聲^(二),

𢶇, 解𢶇也, 手に从ふ, 兌の聲,

(一) 今人多く「脱」¹³⁴⁾を用ひ, 古へは則ち「𢶇」を用ふ¹³⁵⁾。是れ則ち古今字の異也。今「脱」行はれ而して「𢶇」廢る。

(二) 他括の切、十五部。

攪, 治也^(一), 从手發聲^(二),

攪, 治也, 手に从ふ, 發の聲,

(一) 『公羊傳』「亂世を攪して, 諸を正に反す」, 何注して曰く「攪は猶ほ治のごとき也」と¹³⁶⁾。何「猶」と言ふ者は, 何意へらく, 「攪」の本義は「治」に非ずと。之を攪するは, 治を爲す所以也。許は則ち直だ「治」と云ふ。

(二) 北末の切、十五部。

挹, 抒也^(一), 从手邑聲^(二),

挹, 抒む也, 手に从ふ, 邑の聲,

(一) 大雅に曰く「澗く彼の行潦を酌み, 彼に挹みて茲に注ぐ」¹³⁷⁾と。

131) 十篇上(25b)。段注に「此以疊韻爲訓, 亡逸者本義也, 引伸之爲逸游, 爲暇逸」。また説解下文に「从兔, 兔諛訛善逃也」段注に「説从兔之意, 諛, 訛皆欺也, 諛音蠻, 訛言部作訛, 音大和切, 兔善逃, 故从兔兔, 猶佳善飛, 故奪从手持佳而失之, 皆亡逸之意」。

132) 例えば、『荀子』哀公篇に「其馬將失」楊倞注に「失讀爲逸, 奔也」。

133) 例えば、『漢書』五行志下に「魯夫人淫失於齊」。

134) 四篇下(27b)肉部「脱, 消肉臞也」, 段注に「今俗用爲分散、遺失之義, 分散之義當用𢶇手部𢶇下曰, 解𢶇也」。

135) 阮元本『十三經』では『儀禮』に「𢶇手」(郷飲酒禮1, 郷射禮1, 燕禮1, 大射禮2, 公食大夫禮3, 特牲饋食禮2, 有司徹3)が見えるが, 「𢶇」は「拭也」と訓じられ, 音「始銳反」(釋文)で, 『穀梁傳』宣公十八年「秋七月, 邾人戕繪于繪, 戕猶殘也, 𢶇殺也」の「𢶇」は音は「他活反, 又徒活反」(釋文)だが, 訓は「謂捶打殘賊而殺」(注)で, 「解𢶇」の「𢶇」の用例はなく, 『毛詩』召南・野有死麕、『禮記』内則、『左傳』僖公三十三年傳などは「脱」に作る。『方言』卷12に「解, 輪, 稅也」注「稅猶脱耳」, 『箋疏』に「稅, 舊本並同, 説文, 稅, 解稅也, 廣韻稅字注云, 或作脱, 同, 戴氏據此, 改稅作稅」。

136) 哀公十四年。

137) 澗酌。

（二）於汲の切，七部。

杼，挹也^(一)，从手予聲^(二)，

杼，挹む也，手に従ふ，予の聲，

（一）凡そ「彼に挹み茲に注ぐ」¹³⁸⁾を杼と曰ふ。斗部に曰く「斜は杼む也」¹³⁹⁾「𦉳は杼扇也」¹⁴⁰⁾「𦉳は挹む也」¹⁴¹⁾と。水部に曰く「浚は杼む也」¹⁴²⁾「漉は浚ふ也」¹⁴³⁾と。「鞵は井を杼む鞵也」¹⁴⁴⁾。『左傳』「難必ず杼まん」¹⁴⁵⁾，此れ「杼」を段りて「紵」と爲す。「紵」なる者は「緩也」。服虔本正しく「紵」に作る。

（二）神輿の切，五部。

拏，挹也^(一)，从手且聲，讀若植梨之植^(二)，

拏，挹む也，手に従ふ，且の聲，讀みて植、梨の植の若くす，

（一）『方言』に曰く「拏、擻は取也，南楚の間，凡そ物を溝泥中に取りは之を拏と謂ひ，亦た之を擻と謂ふ」¹⁴⁶⁾と。

（二）「植、梨」は木部に見ゆ¹⁴⁷⁾。側加の切，古音は五部に在り¹⁴⁸⁾。按ずるに『方言』の「拏」^ナ「擻」^サ實は一字也。故に許「拏」有りて「擻」無し。

攬，挹也^(一)，从手矍聲^(二)，

攬，挹也，手に従ふ，矍の聲，

138) 『毛詩』大雅・洞酌。

139) 十四篇上(34a)。二徐は「杼」を「杼」に作る。段注に「杼各本从木，今正，手部曰，杼者挹也，挹者杼也，水部浚，杼也，革部鞵，所以杼井也，臼部臼，杼白也，凡以斗挹出之謂之斜，故字从斗」。

140) 十四篇上(34b)。二徐は「杼扇」を「杼滿」に作る。段注に「扇各本作滿，誤，玄應作漏爲是，依許義當作扇，謂杼而扇之，有所注也」。

141) 十四篇上(34b)。段注に「挹亦杼也」。

142) 十一篇上二(32a)。一篆一行本は「杼」を「杼」に作る。段注に「杼者挹也，取諸水中也」。

143) 十一篇上二(32b)。

144) 三篇下(4a)革部「量物之鞵，一曰杼井鞵，古以革」。

145) 文公六年傳。杜注「杼，除也」疏「杼，聲近除，故爲除也，服虔作紵，紵，緩也」。

146) 卷10。箋疏本、校箋本「亦」を「或」に作る。

147) 六篇上(1b)木部「植，植果，偁梨而酢」。段注は『禮記』内則「粗、梨」鄭注「粗、梨之不臧者」及び『爾雅』郭注『山海經』郭傳「植似梨而酢澆」を引き、「按即今梨之肉粗味酸者也」「側加切，古音在五部」という。下平九麻に「植，似梨而酸，或作粗，側加切」。なお、「粗」は「木閑也」(六篇上(37b)木部)。

148) 今韻古分十七部表では側加切(麻韻)は十七部。古十七部諧聲表では「且聲」は五部。

(一)『蒼頡篇』に曰く「攫は搏つ也」¹⁴⁹⁾と。『通俗文』に曰く「手もて把るを攫と曰ふ」¹⁵⁰⁾と。『淮南子』に曰く「鳥窮すれば則ち搏ち、獸窮すれば則ち攫む」¹⁵¹⁾と。按ずるに『衆經音義』卷五、卷十二『説文』を引きて同じ。而して之に注して曰く「𢶏は居逆の切」と¹⁵²⁾。是れ其の據る所の『説文』「𢶏」に作り、轉寫譌りて「𢶏」に作る耳。「𢶏」なる者は「持也」¹⁵³⁾。

(二) 居縛の切、五部。

𢶏、從上挹取也^(一)，从手𢶏聲，讀若莘^(二)，

𢶏、上從り挹み取る也，手に从ふ，𢶏の聲，讀みて莘の若くす，

(校) 二徐「取」字無し。

(一)「取」字各本無し。玄應に依りて補ふ。『通俗文』云く「上從り取るを𢶏と曰ふ」と。¹⁵⁴⁾

(二) 所臻の切、十二部。

𢶏、拾也^(一)，陳宋語^(二)，从手石聲^(三)，𢶏，拓或从庶^(四)，

拓、拾る也，陳宋の語，手に从ふ，石の聲，𢶏，拓或いは庶に从ふ，

(校) 小徐，「語」下に「也」字有り。

(一)有司徹篇「乃ち魚腊の俎に𢶏り，俎は三个を釋き，其の餘は皆な之を取る」。「摘」下に云く「果

149) 玄應『一切經音義』(二十五卷本) 卷3 摩訶般若波羅蜜經第八卷「𢶏裂，字宜作攫，同，九縛、居碧二反，説文，攫，爪持也(譯注者注：「爪持也」は「擣」の説解)，蒼頡篇，攫，搏也，淮南子曰，鳥窮則搏，獸窮則攫，是也」，卷4 大方便報恩經第二卷「爪攫，居縛反，説文，攫，𢶏也，蒼頡篇，攫，搏也，淮南子云，鳥窮則攫，獸窮則啄，是也，𢶏音居逆反」，卷11 正法念經第四卷「攫啄，九縛反，説文，攫，𢶏也，蒼頡篇，攫，搏也，淮南子云，鳥窮則攫，獸窮則啄，是也，𢶏音居逆反」，卷15 十誦律第一卷「攫其，九縛反，説文，攫，𢶏也，蒼頡篇，攫，搏也，𢶏音居逆反」，卷25 阿毗達磨順正理論第三十一卷「擣腹」下に「九縛、居碧二反，説文，攫，𢶏也，通俗文，手把曰攫，蒼頡篇，攫，搏也，獸窮則攫，是也」。

150) 玄應『一切經音義』卷25引。上注参照。

151) 齊俗訓。今本は「搏」を「𢶏」に作り、「攫」を「擣」に作る。段注の引用は玄應『一切經音義』卷3の引く所に同じ。注149)参照。

152) 段玉裁の引く玄應『一切經音義』(『衆經音義』)は明藏二十六卷本で，明藏本は二十五卷本の第三卷を二つに分けたため，第四卷以降が二十五卷本と一卷ずつずれる(『訓讀説文解字注』金冊二篇下齒部注(13)参照)。『衆經音義』卷五、卷十二はそれぞれ注149)の卷4、卷11。卷15も同じく『説文』攫，𢶏也」を引き「𢶏音居逆反」とする。

153) 三篇下(14a) 𢶏部「𢶏，持也，象手有所𢶏據也，……，讀若𢶏」段注「几劇切，按毛詩𢶏與澤作𢶏，𢶏古音當在五部」。

154) 玄應『一切經音義』(二十五卷本) 卷15 僧祇律第十六卷「𢶏去，所隣反，説文，從上挹取也，通俗文，從上取曰𢶏也」。

樹の實を拓る也」¹⁵⁵⁾と。儀禮「摭」古文「擗」に作る¹⁵⁶⁾。此れ實は一字に非ず。雙聲に因り而して異なる。

(二)『方言』に「摭は取也，陳宋之間は摭と曰ふ」¹⁵⁷⁾と。

(三)之石の切，古音は五部に在り。¹⁵⁸⁾

(四)石聲、庶聲皆な古音五部。

擗，拾也^(一)，从手麤聲^(二)，

擗，拾ふ也，手に从ふ，麤の聲，

(一)魯語「收擗して烝す」，韋云く「擗は拾ふ也」¹⁵⁹⁾と。『漢』刑法志「蕭何秦法を擗摭し，其の時に^{よろ}宜しき者を取りて，律九章を作る」¹⁶⁰⁾と。

(二)居運の切，十三部。亦た「拊」に作る¹⁶¹⁾。

拾，掇也^(一)，从手合聲^(二)，

拾，掇也，手に从ふ，合の聲，

(一)『史記』貨殖傳に曰く「俯きて拾ふ有り，仰ぎて取る有り」¹⁶²⁾と。射に「決拾」¹⁶³⁾有り，毛傳に曰く「決は弦を鉤くる所以也。拾は遂也」¹⁶⁴⁾と。拾は左の臂を^つ韜む。即ち俗に所謂る「收拾」也。曲禮「緇^{わた}を拾り足^{シフ}を聚む」，鄭曰く「拾は讀みて^{セフ}涉と爲す，聲の誤也」¹⁶⁵⁾と。

155) 十二篇上(37a)手部。

156) 段注引く有司徹「乃摭于魚腊俎」鄭注に「古文摭為擗」，通志堂本釋文「為擗，之石反，劉音與摭同」(『彙校』に「宋本操作擗」)，阮元校勘記に「古文摭為擗，古，徐本、集釋、通解俱作古，毛本作今，擗，徐本作擗，毛本作擗，葛本、集釋俱作擗，按宋本釋文亦作擗，今本作擗，五經文字手部有擗字，云，之石反，見禮經」。

157) 卷1「擗、擗、摭、挺，取也，南楚曰擗，陳宋之間曰摭，……」，「摭」郭注「盜蹠」。

158) 今韻古分十七部表では、之石切(昔韻)は十六部。古十七部諧聲表では、石聲、庶聲はいずれも五部。注112)引く「第五部第十六部入聲分用說」(『六書音均表』一)参照。

S第五部入聲與第十六部入聲，周秦漢人分用，晉宋而下多以第五部入聲之字韻入於第十六部，鄭氏合藥陌錫爲一部，未爲審矣」。

159) 魯語上。公序本同じ。明道本は「烝」を「蒸」に作る。

160) 顔注に「擗摭謂收拾也，擗音九問反，摭音之石反」。

161) 例えば、『史記』十二諸侯年表に「及如荀卿、孟子、公孫固、韓非之徒，各往往擗摭春秋之文以著書，不可勝紀」，『漢書』藝文志・兵書略に「武帝時，軍政楊僕擗摭遺逸，紀奏兵錄，猶未能備」など。また『方言』卷2「擗、摭，取也，此通語也」，「擗」郭注に「古拊字」。

162) 『史記』通行本は「俯」を「俛」に作る。校勘記無し。

163) 『毛詩』のほか、『國語』呉語「一人善射，百夫決拾」，『儀禮』鄉射禮，大射儀に「釋弓，說決拾」など。

164) 小雅・車攻「決拾既飲」傳に「決，鉤弦也，拾，遂也」疏に「決着於右手大指，所以鉤弦開體，遂著於左臂，所以遂弦」。

165) 曲禮上。鄭注「拾當為涉，聲之誤也」。阮元本は「讀」を「當」に作る。校勘記無し。

(二) 是執の切，七部。

擻，拾取也^(一)，从手𠂔聲^(二)，

掇，拾ひ取る也，手に従ふ，𠂔の聲，

(一) 周南の傳に曰く「掇は拾ふ也」¹⁶⁶⁾。

(二) 都括の切，十五部。

擻，田也^(一)，从手𠂔聲^(二)，春秋傳曰，擻甲執兵^(三)，

擻，田也，手に従ふ，𠂔の聲，春秋の傳に曰く，甲を擻し兵を執ると，

(校) 二徐，「田」を「貫」に作る。

(一) 「田」各本「貫」に作る。今正す。「田，物を穿きて之を持する也」¹⁶⁷⁾。今人「田」を廢し而して専ら「貫」を用ふ。杜『左傳』に注し¹⁶⁸⁾、韋『國語』に注して¹⁶⁹⁾ 皆な「擻は貫也」と曰ふ。

(二) 胡慣の切，十四部。

(三) 成二年『左傳』文。

𦉳，引急也^(一)，从手恆聲^(二)，

𦉳，引くこと急也，手に従ふ，恆の聲，

(一) 『淮南の書』に曰く「大弦𦉳すれば則ち小弦絶ゆ」¹⁷⁰⁾ と。

(二) 古恆の切，六部。

𦉳，蹴引也^(一)，从手宿聲^(二)，

シユク シユク
𦉳，蹴して引く也，手に従ふ，宿の聲，

(一) 「蹴」は猶ほ「迫」のごとき也。古へ多く「戚」^{セキ}¹⁷¹⁾を段りて之と爲す。「蹴引」なる者は

166) 芣苢「薄言擻之」傳。

167) 七篇上(29b)田部。段注に「古貫穿用此字，今貫行而田廢矣」。

168) 說解引く成公二年傳「擻甲執兵」注。

169) 吳語「乃令服兵擻甲」注。

170) 繆稱訓。通行本(鴻烈集解本、集釋本等)は「𦉳」を「𦉳」に作り、「弦」を「絃」に作る。高注「𦉳，急也」。王念孫『讀書雜誌』卷9-10淮南内篇十「大弦𦉳小弦急」に「𦉳，皆當爲𦉳，字之誤也，𦉳讀若互，字本作𦉳，又作𦉳」といい、「𦉳」は「一曰急也」(『說文』十三篇上糸部)の「𦉳」の省文だという。澤存堂本『廣韻』下平十七登「𦉳(古恒切)」下、『五音集韻』下平第五・登第七「𦉳(古恒切)」下、『古今韻會舉要』平聲下・十蒸「𦉳(居曾切)」下引く『淮南子』はいずれも段注引く所に同じ。

171) 十二篇下(42a)戌部「戚，戌也」。段注に「戚之引伸之義爲促迫，而古書用戚者，俗多改爲蹙」また「倉歷切，古音在三部」。

蹴迫し而して引きて之を取る。「縮」^{シユク}古へ「縮」¹⁷²⁾を段りて之と爲す。『毛詩』の傳に曰く「鄰りの釐婦、夜暴風雨室壞れ、趨りて至る。顔叔子之を納め而して燭を執りて旦に放たしむ。而して蒸盡き、屋を縮^ぬき而して之れに繼ぐ」、釋文云ふ、「縮、又た縮^縮に作る、同じ」¹⁷³⁾と。按ずるに武梁祠堂碑に「竿を縮^縮く」と云ふ¹⁷⁴⁾は是れ也。『戰國策』「淖齒齊の權を管^{つかさど}り、閔王の筋を縮^縮き、之を廟梁に縣く。宿昔にして死す」¹⁷⁵⁾。亦た即ち「縮」字。「屋を縮^縮く」は即ち『左傳』に所謂る「屋を抽く」¹⁷⁶⁾也。

(二) 所六の切、三部。

𢶇、相援也、从手虔聲^(一)、

𢶇、相ひ援く也、手^ひに从ふ、虔の聲、

(一) 巨言の切、十四部。

𢶇、引也^(一)、从手爰聲^(二)、

𢶇、引く也、手^手に从ふ、爰の聲、

(一) 大雅「爾の鉤援を以て」、毛傳に「鉤援、鉤は鉤梯也、鉤を以て引き城に上る所の者」、又た「然^かく畔援する無れ」、傳に曰く「是く畔道する無く、是く援取する無し」と。¹⁷⁷⁾

(二) 雨元の切、十四部。

𢶇、引也^(一)、从手畱聲^(二)、𢶇、擿或从由^(三)、𢶇、擿或从秀^(四)、

𢶇、引く也、手^手に从ふ、畱の聲、𢶇、擿或いは由^由に从ふ、𢶇、擿或いは秀^秀に从ふ、

(一) 鄭風「左に旋り右に抽^ぬく」、傳に曰く「左旋は、兵を講^{かま}ふ、右抽は、矢を抽き以て射^射る」と。¹⁷⁸⁾

172) 十三篇上(7b)糸部「亂也、……、一曰蹴也。」「所六切、三部」。

173) 小雅・巷伯「哆兮侈兮、成是南箕」傳。「昔者、顔叔子獨處於室、鄰之釐婦獨處於室、夜暴風雨至而室壞、婦人趨而至、顔叔子納之而使執燭放乎旦、而蒸盡縮屋而繼之」。釋文「縮屋、所六反、又作縮、同」。通志堂本、宋刻宋元遞修本は「縮」に作る。黃焯『彙校』に「阮云、縮當作縮」、法偉堂『校記遺稿』に「縮、正義作縮、是也」。

174) 『金石萃編』卷二十一・武氏左右畫像題字に「顔淑獨處、飄風暴雨、婦人乞宿、升堂入戶、燃蒸燭、懼見意疑、未明蒸盡、縮竿續之」。當該画像は『漢代畫象全集』(二編 圖 147)に著録されている。

175) 秦策三。

176) 昭公六年傳「禁芻牧採樵、不入田、不樵樹、不采蕪、不抽屋、不強匄」。

177) 皇矣。阮元本、傳に「鉤援」二字無し。

178) 清人。

竹部に曰く「籀は書を讀む也」。¹⁷⁹⁾ 牆有茨の傳に曰く「讀は抽也」。¹⁸⁰⁾ 『方言』に曰く「抽は讀也」。¹⁸¹⁾ 『尚書』「克く由りて之を釋す」。¹⁸²⁾ 大史公自序「史記、石室、金匱の書を紬す」¹⁸³⁾。「紬」¹⁸⁴⁾ は即ち「籀」也。「籀」の言は「抽」也。

(二) 敕鳩の切，三部。

(三) 由の聲也。「擣」或いは一本「籀文」に作るは非也。

(四) 「秀」¹⁸⁵⁾ 字，古本當に出すべからず。篆體の偏旁「秀」に作れば，則ち古へ偏旁に於ては諱まざるを證すべき也。¹⁸⁶⁾

擢，引也^(一)，从手翟聲^(二)，

擢，引く也，手に从ふ，翟の聲，

(一) 毛傳に曰く「楫は舟を擢く所以也」¹⁸⁷⁾ と。「舟を擢く」は舟を引くを謂ふ也。

(二) 直角の切，古音は二部に在り。¹⁸⁸⁾

拔，擢也，从手及聲^(一)，

拔，擢く也，手に从ふ，及の聲，

(一) 蒲八の切，十五部。

擢，拔也^(一)，从手匿聲^(二)，

擢，抜く也，手に从ふ，匿の聲，

(一) 『孟子』「宋人に其の苗の長ぜざるを閔ひ而して之を擢く者有り」，趙云「擢は之を挺拔し亟やかに長ぜしめんと欲する也」。¹⁸⁹⁾ 『方言』「擢、擢、拂、戎は抜く也。關自りして西は或い

179) 五篇上(3b)

180) 鄘風。「中菁之言，不可讀也」傳。

181) 卷13。

182) 立政。

183) 集解に「徐廣曰，紬音抽，索隱に「如淳云，抽徹舊書故事而次述之，徐廣音抽，小顏云，紬謂綴集之也」，また「案，石室、金匱皆國家藏書之處」。

184) 十三篇上(11b)「紬，大絲繪也」段注に「段借爲抽字」。

185) 光武帝の諱。

186) 一篇下(4b)艸部「莠」，九篇上(43b)厶部「𡗗」の或體「誘」も「秀」に従う。

187) 衛風・竹竿「檜楫松舟」傳。

188) 今韻古分十七部表で「直角切」(覺韻)は三部，古十七部諧聲表で翟聲は二部。『六書音均表』一「弟二部弟三部分用説」に「詩經及周秦文字分用畫然，顧氏誤合爲一部，江氏古韻標準既正之矣，顧氏於平聲合二部爲一，故弟二部之字轉入於弟三部入聲者，不能分別而箋識之也」。

189) 公孫丑上。

は拔と曰ひ、東齊海岱の間は擣と曰ふ」と。¹⁹⁰⁾

(二) 烏黠の切、十四、十五部。¹⁹¹⁾

擣、手椎也^(一)、一曰築也^(二)、从手𠂔聲^(三)、

擣、手もて椎つ也、一に曰く、築也、手に从ふ、𠂔の聲、

(校) 小徐、「擣」を「𠂔」¹⁹²⁾に作り、「𠂔」を「壽」に作り、「一曰築也」四字、「聲」字下に在り。

(一) 手を以て椎と爲して之を椎つ。

(二) 木部に曰く「築は擣く也」¹⁹³⁾。二篆轉注爲り。「築」なる者は必ず築を用ひ徒手に非ざる也。故に別と爲す。

(三) 都皓の切、古音は三部に在り。¹⁹⁴⁾ 小徐本篆を「𠂔」に作り、解に「壽の聲」¹⁹⁵⁾と云ふ。

攀、係也^(一)、从手𠂔聲^(二)、

攀、係る也、手に从ふ、𠂔の聲、

(一) 「係」なる者は「繫束する也」¹⁹⁶⁾。『易』小畜「孚有り攀如たり」、馬曰く「連也」、虞曰く「引也」。¹⁹⁷⁾ 「攀」なる者は係ぎて之を引く。其の義「擣」に近し。

(二) 呂貪の切、十四部。

挺、拔也^(一)、从手廷聲^(二)、

挺、抜く也、手に从ふ、廷の聲、

(一) 『左傳』「周道挺挺たり」¹⁹⁸⁾、直也。月令「重囚を挺す」¹⁹⁹⁾、寬也。皆な引申の義。

(二) 徒鼎の切、十一部。

擣、拔取也、南楚語^(一)、从手𠂔聲^(二)、楚辭曰、朝擣阨之木蘭^(三)、

190) 卷3「自關而西或曰拔、或曰擣、自關而東、江淮南楚之間或曰戎、東齊海岱之間曰擣」。

191) 今韻古分十七部表で黠韻は十五部、古十七部諧聲表で𠂔聲は十四部。『六書音均表』三に「第十三部第十四部與第十五部同入説」に「第十三部第十四部與第十五部合用最近、其入音同十五部」。

192) 「手」に从い、「𠂔」(「壽」の篆文)の聲。

193) 六篇上(30b)「築」説解。二徐同じ。段注本は「擣」上に「所以」を補う。

194) 今韻古分十七部表で皓韻は二部、古十七部諧聲表で𠂔聲は三部。『六書音均表』

195) 古十七部諧聲表で壽聲は三部。

196) 八篇上(34a)人部「係」説解。

197) 九五の爻辭。釋文「攀、力專反、馬云、連也、徐又力轉反、子夏傳作戀、云、思也」。李鼎祚『集解』「虞翻曰、……、攀、引也」。

198) 襄公五年傳「詩曰、周道挺挺」杜注「挺挺、正直也」。

199) 仲夏之月。鄭注「挺猶寬也」。

擿, 抜き取る也, 南楚の語, 手に从ふ, 擿の聲, 楚辭に曰く, 朝に^{あした}阨の木蘭を擿ると,
 (校) 小徐, 「南楚語」三字無し。二徐, 「擿」を「寒」に作り, 「辭」を「詞」に作る。大徐, 「阨」
 を「批」に作る。

(一) 『莊子』至樂篇に「蓬を擿きて之を取る」, 司馬注して曰く「擿は抜く也」と。²⁰⁰⁾ 『方言』
 に曰く「擿は取也, 南楚は擿と曰ふ」, 又た曰く「楚は之を擿と謂ふ」と。²⁰¹⁾

(二) 九輦の切, 十四部。「擿」「擿」二つ通ず。又た音蹇。²⁰²⁾

(三) 「阨」各本「批」に作る。今『韻會』²⁰³⁾に依る。『楚辭』と合ふ。但だ『説文』「阨」字無き耳。
 句は離騷に見ゆ²⁰⁴⁾。王逸曰く「蹇は取也, 阨は山の名」と。

揅, 遠取之也^(一), 从手突聲^(二),

揅, 遠く之を取る也, 手に从ふ, 突の聲,

(校) 大徐, 「突」を「探」に作る。

(一) 「探」の言は「深」也。『易』に曰く「噴を探り隠を索む」²⁰⁵⁾と。

(二) 他含の切, 古音は七部に在り。²⁰⁶⁾

揅, 揅也^(一), 从手擿聲^(二),

揅, 揅也, 手に从ふ, 擿の聲,

(校) 二徐, 「揅」を「探」に作る。

(一)。『周禮』「揅人, 王意を揅序し以て天下に語るを掌る」, 釋文に曰く「探と同じ」。²⁰⁷⁾ 按ず
 るに許書は則ち義同じくして各おの自ら字を爲す。

200) 今本(諸子集成本、百子全書本等)は「取」を「指」に作る。釋文「擿, 居輦反, 徐紀偃反, 又起虔反, 司馬云, 抜也, 或音厥」。

201) 卷1「擿、擿、擿、擿, 取也, 南楚曰擿, ……」郭注「音蹇」, 卷10「擿, 取也, 楚謂之擿」郭注「音蹇, 一曰蹇」。

202) 『方言』卷10郭注(上注参照), また『爾雅』「芼, 擿也」注「謂拔取菜」釋文に「擿也, 九輦反, 取也, 與揅同, 郭又音蹇, 音義云, 本又作毛蹇」。

203) 『古今韻會舉要』上聲・十六銑・蹇(九件切)小韻「擿, 説文, 抜取也, 本作擿, 南楚語, 从手蹇聲, 引楚辭朝擿阨之木蘭兮, 今作蹇, 集韻或作擿, 俗作擿非是」。

204) 今本(章句本、補注本)は「擿」を「蹇」に作る。

205) 繫辭傳上。通行本(阮元本、『集解』本)は「噴」を「隨」に作る。この引用の上文「聖人有以見天下之隨」釋文に「隨, 仕責反, 下同, 九家作冊, 京作噴, 云情也」。

206) 今韻古分十七部表で「他含切」(覃韻)は八部, 古十七部諧聲表で突聲は七部。

207) 夏官序。官「揅人, 中士四人, 史四人, 徒八人」注に「揅人主揅序主意, 以語天下」, 釋文に「揅人, 他南反, 與探同」。

（二）他紺の切，古音は七部に在り。²⁰⁸⁾

搯，摧也^(一)，从手妥聲^(二)，一曰，兩手相切摩也^(三)，

按，摧也，手に从ふ，妥の聲，一に曰く，兩手もて相ひ切摩する也。

（校）二徐，「按」を「搯」に，「摧」を「推」に，「妥聲」を「委聲」に，「兩」を「兩」に²⁰⁹⁾作る。

（一）「摧」各本「推」に作る。今『玉篇』²¹⁰⁾、『韻會』²¹¹⁾、『文選』注²¹²⁾、玄應梵書音義²¹³⁾に依りて正す。

「摧」なる者は「擠す也」²¹⁴⁾。『周禮』守祧²¹⁵⁾、禮經士虞²¹⁶⁾、特牲²¹⁷⁾、少牢²¹⁸⁾「隋祭」或いは「隋」²¹⁹⁾

208) 今韻古分十七部表で「他紺の切」（勘韻）は八部，古十七部諧聲表で搯聲は七部。

209) 七篇下(39a)兩部に「兩，再也」「兩，二十四銖爲一兩」。「兩」字段注に「尋部曰，再者一舉而二也，凡物有二，其字作兩不作兩，兩者二十四銖之稱也，今字兩行而兩廢矣」。

210) 『大廣益會玉篇』手部第六十六「搯，儒佳、奴和二切，說文云，摧也，一曰兩手相切摩也」。

211) 『古今韻會舉要』平聲下・五歌「搯，奴禾切，徵次濁音，說文，摧也，从手妥聲，一曰兩手相切摩也，……，阮孝緒字畧云，煩攪猶搯莎，集韻或作按，又支灰韻」。

212) 卷18長笛賦「按拏按臧」李善注「說文曰，按，摧也，奴迴切」。

213) 卷12生經第一卷「按彼，奴和、奴回二反，說文，按，摧也，又亦兩手相切也」，卷15五分律第二十六卷「三按，三蒼，奴迴反，手按也，說文，按，摧也，一曰兩手相切也」，卷16大比丘三千威儀經卷下「按手，奴和、乃迴二反，說文，按，摧也，一曰兩手相切也」卷22瑜伽師地論第八十四卷「按按，奴和、乃迴二反，說文，按，摧也，兩手相切也」。

214) 十二篇下(26a)手部「摧」說解。

215) 春官。「既祭，則藏其隋與其服」注「鄭司農云，隋謂神前所沃灌器名，玄謂，隋，尸所祭肺脊，黍稷之屬，藏之以依神」釋文「其隋，威吁患反，劉相患反」。

216) 「祝命佐食墮祭」は「墮」に作り，注に「下祭曰墮，墮之猶言墮下也，周禮曰既祭則藏其墮，謂此也，今文墮爲綏，特牲、少牢或爲羞，失古正矣，齊魯之間謂祭爲墮」，釋文に「墮祭，許患反，注同，又相患反」，阮元校勘記に「墮之猶言墮下也，猶言二字集釋倒，張氏曰，按釋文云，猶墮，則言字當在猶字上，墮下之墮當作墮，今本以墮解墮，其誤不待辨，從釋文，識誤按云，墮古通用隋，周禮守祧之文可證，即儀禮中亦皆作隋，故注以墮解之，若墮乃墮之俗體耳，注文當作隋之言猶墮，張氏不知上墮字與經並應爲隋，而改下墮字以從俗，疏矣○按儀禮內隋祭之隋或作墮，或作隋，諸本不能畫一，說文隋裂肉也，唐韻徒果切，此字惟周禮有之，他經罕見，自隋以來借爲隨字，而本音本義亡矣，此注以墮下釋隋祭，世遂以墮代隋，間有作隋者，據周禮正之也」。また「不綏祭，無黍羹醢、載、從獻」は「綏」に作り，注に「不綏言獻，記終始也，事尸之禮，始於綏祭，終於從獻，綏當爲墮」，釋文「不綏，依注音墮，許患反，劉相患反」。

217) 「按祭」に作る。「祝命按祭」鄭注「按祭，祭神食也，士虞禮古文曰，祝命佐食墮祭，周禮曰，既祭則藏其墮，墮與按讀同耳，今文改按皆爲綏，古文此皆爲按祭也」，また「佐食按祭」注「妥亦當爲按，……，按祭亦使祭尸食也，其按祭亦取黍稷肺祭，今文或皆改妥作按」，また「佐食按祭」。

218) 「綏祭」に作る。「上佐食以綏祭」注「綏或作按，按讀爲墮，將受嘏，亦尊尸餘而祭之，古文墮爲𦉰」，釋文「以綏，許規反，劉相規反，并注按及墮亦放此，下皆同」，また「上佐食綏祭」注「綏亦當作按，古文爲𦉰」，また「其綏祭如主人之禮」注「綏亦當作按，古文爲𦉰」。また「祝反南面」注「未有事也，墮祭爾敦，官各肅其職，不命」は「墮」に作り，その注の釋文に「隋祭，許規反，劉相規反，下同」。

219) 四篇下(30b)肉部「隋，裂肉也」段注に「其字古文士虞禮作隋，與周禮同，特牲、少牢篇今文作綏，古文作按，或作妥，鄭注云，周禮作隋，隋與按讀同，又云，按讀爲隋，注曾子問亦云，綏，周禮作隋，是鄭以隋爲正字，與許同也」「徒果切，十七部」。

に作り、「墮」²²⁰⁾に作り、或いは「掇」に作り、或いは「綏」²²¹⁾に作る。「隋」當に是れ正字なるべし。「掇」、「綏」當に是れ段借なるべし。鄭云ふ「下祭を墮と曰ふ。之を墮すは猶ほ墮下すると言ふがごとき也」²²²⁾。按ずるに隋聲、妥聲は同じく古十七部に在り。²²³⁾許「掇は摧也」と云ふ。「摧」亦た墮下の義有り。「掇」篆疊韻雙聲皆な妥聲に當る。²²⁴⁾下「掇」一解は則ち更に當に「妥」に従ふべきは、言を待たず。

(二) 各本「妥聲」に作る。今正す。徐鉉「俗に掇に作るは非」と曰ふは、乃ち『説文』「妥」無きに因りて此の謬説を爲す也。奴禾の切²²⁵⁾、十六十七部。

(三) 玄應引きて「摩」字無し。²²⁶⁾阮孝緒『字略』に云ふ「煩擱は猶ほ掇のごとし」²²⁷⁾と。今人多く此の義を用ひ而して字「擱」に作る。

擊，飾也^(一)，从手敝聲^(二)，一曰擊也^(三)，

擊，飾也，手に从ふ，敝の聲，一に曰く，擊つ也，

(校)「飾」，二徐「別」に作る。「擊」，小徐「繫」に作る。「一曰擊也」四字，大徐「从」上に在り。

(一) 各本「別也」に作る。通ずべからず。今正す。『文選』洞簫の賦，注引きて「擊は飾也」²²⁸⁾と。「飾」なる者は「𠄎也」。巾部に見ゆ。²²⁹⁾「飾」なる者は今の「拭」字。蓋し一本「𠄎」に作る。其の義一也。而して字形一たび譌りて「刷」に爲り。再び譌りて遂に「別」に爲る。此れ攷覈する者宜しく知るべき所也。「拭」は「拂」²³⁰⁾と義略は同じ。蔡邕『篆勢』に曰く「揚波振擊」²³¹⁾と。『文選』「波を撤ち而して濟る」，「撤は擊に同じ」。²³²⁾又た『史記』荆軻傳「跪きて席を蔽ふ」²³³⁾，

220) 十四篇下(5b) 自部「墮，敗城自曰墮，……，墮，篆文」段注に「隸變作墮」「許規切，古音在十七部」。

221) 十三篇上(38b) 糸部「綏，車中靶也」，段注に「綏以妥會意，即以妥形聲，古音在十七部，今音息遺切」。

222) 士虞禮注。卷216) 參照。

223) 妥聲は十五部。

224) 十二篇下女部，「妥」(15b)は「十六十七部合音最近，故讀於詭切也」，「妥」字は『説文』に無いが，段玉裁は女部末(29b)に補い「説文失此字，偏旁用之，今補」という。音は「他果切，十七部」。

225) 今韻古分十七部表では「奴禾切」(戈韻)は十七部。

226) 注213) 參照。

227) 『古今韻會舉要』「掇」字下引。注211) 參照。また『毛詩』周南・葛覃「薄汙我私」傳「汙，煩也」箋「煩，煩擱之」釋文「煩擱」下に「阮孝緒字略云，煩擱猶掇也，掇音奴禾反，莎音素禾反」。但し，いずれも「掇」を「掇」に作る。

228) 卷17。「擊涕攷淚」李善注「説文曰，擊，拭也，匹結切」。胡刻本は「飾」を「拭」に作る。

229) 七篇下(50a)「飾」説解。段注に「又部曰，𠄎，飾也，二篆爲轉注，飾拭古今字，許有飾無拭，凡説解中拭字皆淺人改飾爲之」。

230) 十二篇上(51b) 手部「拂，過擊也」。

231) 『古今韻會舉要』入聲・九屑「擊，匹蔑切，……，説文擊也，从手敝聲，一曰拂也，……，又蔡邕篆勢曰，揚波振擊，……」。

232) 卷51 王褒 四子講德論。李善注「説文曰，擊，擊也，擊與撤同也，疋設切」。

233) 索隱に「蔽音疋結反，蔽猶拂也」。

孟荀傳「席を撤^{ぬぐ}ふ」²³⁴⁾は、皆な席を拭^{ぬぐ}ふを謂ひ、皆な「擊」の異體也。

(二) 芳滅の切、十五部。

(三) 此れ別の一義。『韵會』「擊也，一曰拂也」に作る。²³⁵⁾「拂」は即ち「飾」，其の先後を易ふる耳。

使用テキスト

『說文解字注』

嘉慶二十年經韻樓本影印（上海古籍出版社，1981年）

必要に應じて，下の版本を参照

嘉慶二十年經韻樓本影印（藝文印書館，1981年）

皇清經解本

同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

阮元本影印（藝文印書館，1989年）

『經典釋文』

通志堂本

必要に應じて宋刻宋元遞修本を参照。

本稿は JSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

234) 「平原君側行撤席」索隱「按，字林曰，撤音疋結反，韋昭曰，敷蔑反，張揖三蒼訓詁云，撤，拂也，謂側而行，以衣撤席為敬，不敢正坐當賓主之禮也」。通行本は「撤」を「撤」に作り，索隱は「撤」に作る。
『古今韻會舉要』入聲・九屑・擊（必結切）小韻に「撤，史孟子傳側行撤席，注，撤，拂也」。

235) 注 231) 参照。

236) 十二篇上 (28b) 手部「握」説解。

